

(82) 栃木県栗野町の大百川鉱山

本探査記の「(81) 栃木県栗野町の発光路鉱山」の報告文中に掲載している発光路鉱山地質鉱床図中に、発光路鉱山の他に、「大百川鉱山」も記されていた。尾根を乗り越えた、南方にある鉱山である。「百川」という川に沿った鉱山である。が、そのあたりを現在の地形図で調べると、そのあたりは、「永野川」という川の上流である。「百川」という名称は全く見つけることができなかった。永野川は流れ下って栃木市を通り、小山市で、巴波川に合流して、終わっている。資料や地形図などにおいて、名称等の使用に間違いが、あり得ないことではないと考た。発光路鉱山跡の確認ができた後、それらしい現地に1回目の探査に出かけた。

永野川に沿って、32号線を北西方向に進み、199号線に入り、更に北西方向に進んで行った。落合地区に達すると、道路はT字型となり、正面に地区の案内板があった。何とその看板に、「百川」という文字があるのを見つけた。現在の地形図では、道路に沿って流れている川の名は、永野川であるが、地区での呼称は、百川（びゃくかわ）であることがわかった。つまり、簡単に言えば、永野川の上流の呼称は「百川」であることが判明した。気をよくして、村道から林道のようになった199号を、百川に沿って車で進んで行った。車で進めるところまで進んだが、途中、林道にゲートがあり、その先への一般車の通行が遮断されていた。直ぐ近くには、車を駐車できる格好の広場があった。この地点から、それらしい現地あたりまでは、大分先のようなのである。歩くと、1時間から2時間かかるであろう。周りは森林であり、GPSは全く機能しない。また、携帯電話は圏外である。著者は探査のたびに装着している高度計付き時計は、標高差は出してくれる。が、水平方向の移動距離は出してはくれない。標高差の低いならかな林道では、表示される標高値もあやふやとなる。探査の時間、戻りの時間のことも考え、今回は「百川」の単語を、確認できたことを探査の成果として、帰還することとした。

後日、2回目の探査に出かけた。林道のゲートまでは、小山市内から1時間強で到着した。ゲートから先の林道は、立派なものである。何故ゲートを閉めているのか理解ができない。とにかく。現地付近までは約1時間半ほどかかった。そして、沢、林道近傍の、何か所かに、坑口跡を見つけた。が、はっきりとしたズリ跡が見つからない。また、近傍に、マンガン鉱山らしい、黒くて重い転石が見つからない。それ以上に気を引いたのは、地形図にない、それほど古くもない、立派な林道が、坑口跡の先ずっと続いていたことである。当然ながら、この林道は参考になっている地質鉱床図（昭和28年のもの）中にもない。林道の幅の広さ、仕上げの程度からすると、この林道は山の尾根を超えているのかもしれないと考えた。とすれば、発光路側に繋がっているのかもしれない。前方の尾根上には、これまた地形図にはない送電線が伸びている。坑口跡を後にして、林道を先に進むことにした。半時間ほどで、尾根上に達した。そこから発光路地区が眼下に見えた。しかし、林道は、尾根上にある鉄塔の下部で行き止まりとなっていた。発光路側へ繋がる道は見つけられなかった。

2013年になり、「大百川鉱山」の探査記をまとめようと考えたが、前回までに得られた資料では、地形図中での鉱山跡が、不明瞭であった。現場の現状と、地形図の内容が、大分合わないためである。両側を山に囲まれた谷間なので、GPSによる測地ができていなかった。また、肝心のマンガン鉱の標本も採集していない。地形図中での坑口跡の位置の確定と、標本たるべきマンガン鉱の採集を目指して、3回目の探査に出かけた。結果、坑口のある沢脇に、鉱山事務所飯場跡らしい小さい平坦地を確認した。またその近傍で、真っ黒の大きな転石を見つけ、ハンマーで端を打ち欠いた。綺麗なピンク色の破断面が出た。チョコレート色の脈もある。良好なマンガン鉱の標本を手に入れることができた。坑口跡の先の林道で、上空の見晴らしのよい箇所があり、GPS計測で測地をすることができた。

大百川鉱山には、幾つもの鉱床があった。今回確認した坑口跡は、それらのうちの1つである「八重垣鉱床」と判断した。残りの鉱床跡を、是非とも確認したいものである。良いズリ、転石などが見つかるところであることを期待して。

なを、林道のゲートが開いていれば、尾根まで車で登り上がれる。当然、現地に、車で横付けできる。

探査日 2011年、2013年5月

図1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。上の赤丸は発光路鉱山跡。本探査記の(81)を参照のこと。その下の赤丸が今回紹介する大百川鉱山跡。右下のPは車を駐車した場所。直ぐ先に橋があり、そしてゲートがある。何故か、常時閉としている。先の林道は立派で、尾根の上まで伸びているのであるが、仕方がないので、Pの所から歩くことになる。鉱山跡までは約1時間半。沢の名前は、地形図では永野川なのであるが、上流部のこのあたりでの呼び名は、百川（びゃくかわ）であることがわかった。大百川鉱山跡から上流に、地形図上では、道が書かれているが、現在では消滅している。その代わり、古くはない立派な林道が開削され、発光路との間の尾根まで伸びている。



図2 図1の拡大図。参考にした現在の地形図には沢水が描かれていないので、水色の曲線で沢水を書き入れた。橋の所から、地形図中の林道は消滅している。×印を付けている。黒曲線で描いた少し新しい林道が、尾根の上まで伸びている。黄緑丸が坑口跡。幾つもあった。赤ベタがプラト一部であり、鉱山施設跡と思われるが？ 茶色ベタがズリ跡。その付近の沢で、黒くて大きい転石を割った。良いマンガン鉱の標本を採集することができた。

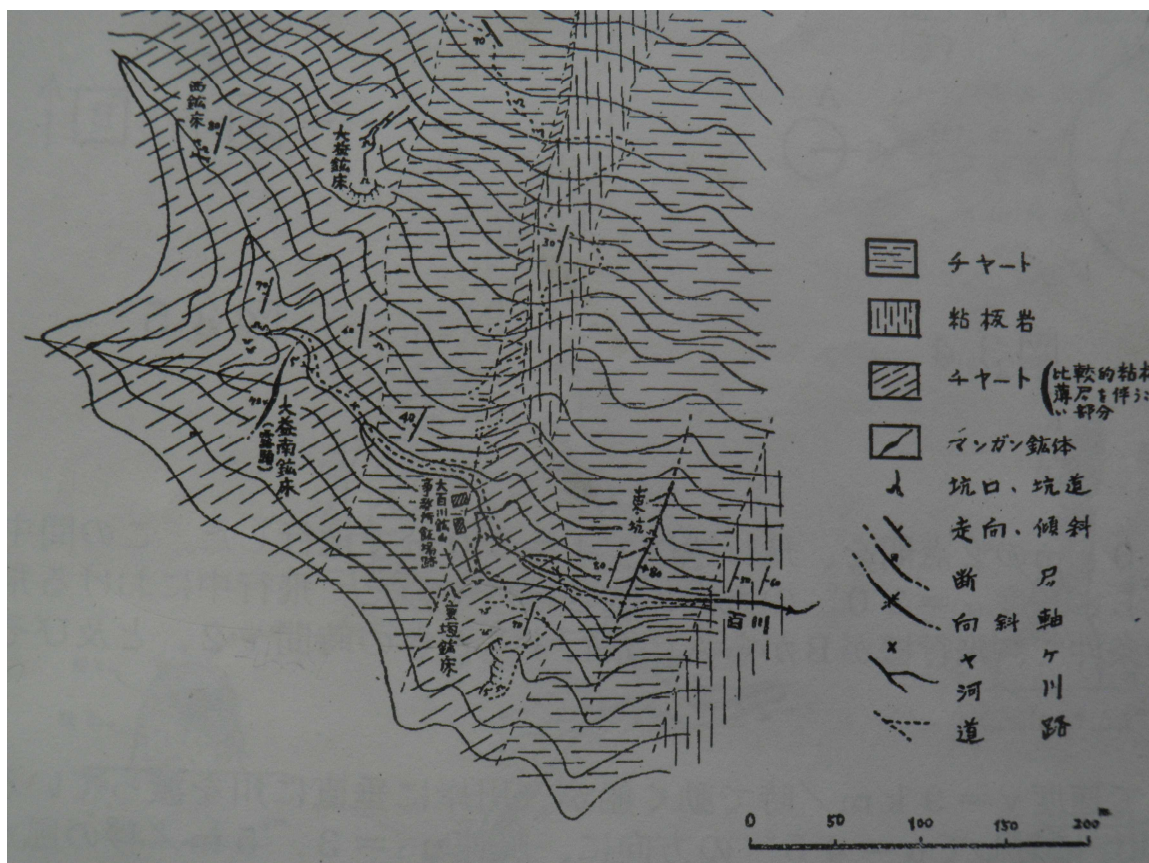


図3 参考文献(1)より複写掲載。部分図。この地質図の全体は本探査記の(81)「栃木県栗野町の発光路鉱山」の項に掲載している。沢の名称「百川」、鉱山の名称「大百川」がある。付近に幾つもの鉱床があった。そして、それらへの坑口記号も書き込まれている。今回確認したのは「八重垣鉱床」と考えている。事務所飯場跡の所から、北側斜面に葛折りに道が書き込まれている。先は、尾根そして、発光路鉱山に繋がっている。が、林道脇からはこの道への入口は全く見つけることができなかった。自然に戻ったのであろう。次回には、他の鉱床の探査を行いたいものである。

鉱山跡写真



写真1 図1中のP点付近である。前方にゲートがあり、一般車の通行を閉鎖している。ここから歩くことになる。この写真の右側には、何故か東屋付きの結構な広さの空き地がある。車を駐車できよう。



写真2 林道から見た、百川の右岸にあった坑口群。少なくとも3つは見える。



写真3 林道脇にあった坑口群。
図2中の橋の傍である。左のガードは橋に繋がっている。



写真4 坑口の1つの内部の様子。
しっかりしている。



写真5 もう1つの坑口の内部の様子。これもしっかりしている。



写真6 2回目の探査の時、林道を尾根まで登り上がった。下に見えるのは、発光路地区。前方山の斜面中には発光路鉱山跡がある。



写真7 尾根上での林道の終点である（2011年時点で）。空に送電線がある。右脇に鉄塔が建っている。

採集鉱物写真

バラ輝石を主とした、ありふれたマンガン鉱石であるので未掲載。が、茶色のハウスマン鉱（＝チヨコレート鉱）の脈が幾層も入っている。

参考文献

（１）「栃木県鹿沼地方マンガン鉱床調査報告」、宮本弘道、高瀬博、丸山修司、地質調査月報（第５巻、第４号、７－（１６３）～２６－（１８２）、昭和２８年。